# 千刈狸の呟き

## ～たし算ひき算～

仔　狸

今の時代人間に換算すると90歳超のシニア狸に会うことは珍しいことではなくなってきた。一昔前なら超高齢といわれた狸たちでも、巣穴に畑を作って独居している。医療や介護サービスの進歩、バリアフリーの巣穴や家電の発達などいろいろな要素が狸に優しい環境をつくっているのだと思う。仔狸が毎日通っている病院にも高齢なシニア狸が入院したり通院している。程度の差はあるが認知症を併せ持っていることも多く、驚くような出来事が起こることも多い。経験豊富なシニア狸の考えていることは、若い狸には想像もつかないことも多い。入院中で安静といわれていても歩いてしまう、時には点滴をしていることも忘れてしまい点滴が抜けてしまう、その時に転倒してしまうこともある。シニア狸にしてみれば、尿意を催したからトイレに行ったというとても自然な行動をしたのに注意をされる。もちろん病院側はシニア狸の病状と安全を第一に考えた結果なのだから、今後同じようなことがおこらないような対策を立てないといけないし、万一転んで骨折したら大変なので、注意もするだろう。シニア狸にとっては時に不本意で、面白くない思いをする場面もあると思う。

狸の一生を考えてみると、生まれたばかりの狸は親狸から息をすることや啼くことを受け継いでこの世に出てくる。この状態がゼロ（啼いて呼吸をしているから１？）。周囲を認識して笑うようになって、言葉を覚え、国語・算数・社会・理科・・・、料理を覚え、仕事を覚えetc.。ずっと足し算が続いていく。狸のメモリー機能もどこかで空き容量が足りなくなって、不要な情報を削除しながら一定期間を過ごした後は引き算が始まる。今までなら書き留めることも無く記憶できたことが覚えられないとか、「あれなんだっけ」みたいに物の名前が思い出せないという時期を過ごし、以前なら普通にしていたことが少しずつできなくなってくる。一匹で電車に乗れない、朝昼夕の薬の管理ができない、食事ができなかったり食べたことを思い出せなかったり、周りの家族を認識できなくなることもあるのだろう。徐々に引き算が進んで限りなく１に近づいていく。ちょっと前の時代なら、ほかの病気やケガが原因で引き算の途中で残念ながら亡くなってしまう狸も多かったと思うが、今の時代は狸の自然史を最後まで見守れる時代になったように思われる。

仔狸も引き算に関して考えることが多くなった。最近薬の名前がすぐ出てこないことは引き算の始まりなのかと思うが、時には笑えないくらい深刻な場合もある。仔狸の周りや病院にいるシニア狸をみていて、今日は昨日と同じようにできるかとても心配になる。病院や施設にいると食事は時間で運ばれてくるし、必要があれば薬も配ってもらい飲むのを手伝ってもらえるので、日々引き算がおこっているかもしれないことは気づかないと思うが、巣穴に退院して過ごす場合には周りがどの位かかわるのが適切なのか考えないといけないと思われる。今日が何月何日なのか、さっきの電話が誰からの電話なのか、昼ご飯に何を食べたのか・・・昨日はわかっていたのに今日はわからないことがある・・・とは言っても次の日には前の日が嘘だったようにすべてがわかることもある。まだ残っている認知機能を失わないように気長に見守ることが必要だと思う。見守るということは時としてとても大変なことで、自分が代わりにやったらもっと早く適切にできると思っているので、黙って待つことはある意味忍耐を要する。

子育てをしたことのない仔狸が言うのもなんだが、世の中の親狸が子供を育てる場合は、子供が何かを行うときはじっと見守り、上手にできたときは褒めてあげるのだろう。そういう気持ちに戻ってシニア狸を見守ってあげるやさしさを持てば、介護も楽しく感じられるような気がする。これからシニア狸の割合が増加し、シニア狸がシニア狸を介護するような時代にむけて、介護サービスの上手な利用の仕方を教えてあげる場を充実して、介護は大変だけど楽しいと思えるような環境を整備していくことが若い狸世代の役割で、最終的には自分たちが介護を受ける立場になった時に良かったと思えるのだと思う。

ゼロで生まれて、少しずつ足し算を積み重ねていろいろな経験や知識を若い狸に伝えてくれたシニア狸が穏やかに引き算の時代を過ごして、安らかにゼロに戻っていけるような時代が来てくれればと思う。

【発行所】一般社団法人 由利本荘医師会（毎月１回発行）　【医師会HP】http://honyui.jp/
由利本荘市水林456-4 TEL0184㉒4085